

パレスチナ赤新月社医療支援事業（ガザ地区）～実派遣から緊急帰国まで～

救急部看護師 藤原 真由

派遣期間：2020年1月10日～3月9日

派遣地：イスラエル パレスチナ自治区・ガザ

イスラエル領内にあるガザ地区では、日本赤十字社とパレスチナ赤新月社が協働し、2019年12月から医療支援事業を実施しています。当事業は、ガザ地区内にあるパレスチナ赤新月社が運営する病院を対象としており、診療プロトコルと看護プロトコルの作成を通じて、医師・看護師の医療技術と医療の質向上を目指しています。事業背景や概要の詳細は他の派遣報告や当事業の現地での活動内容の報告書もご参照ください。

（現地での活動報告 https://www.osaka-med.jrc.or.jp/aboutus/international/pdf/006_145.pdf）

2020年2月末に、私達は現地看護師とともに、2ヶ月かけて3種類の看護プロトコルを完成させました。次のステップは、看護の現場へ周知させることです。作成されたプロトコルは、現場で継続して活用されてこそ価値がありますので、院内の全看護師を対象にワークショップの開催を計画しました。

事業としては、プロトコル作成だけでなく、こういった研修も現地看護師によって開催できるようになることが目的であったため、ワークショップは現地看護師から構成されるプロトコルワーキンググループのメンバーに計画・実施してもらうこととしました。しかし、継続教育研修の機会が少なく、研修計画の立案には不慣れであり、効果的に内容を伝える方法、参加者の集中力を研修終了後まで維持できるような工夫、実施前後の評価方法



完成した看護プロトコル

などを考慮した企画案の作成に時間を要した上に、現地の習慣や傾向を取り入れるために、現地看護師の意見を聞き、同意を得ながら進めることは、ある程度関係者間の共通認識が得られている日本での研修計画よりも難しいことでした。

ワーキンググループのメンバーと試行錯誤の上、ワークショップは2020年3月2日、4日、5日によりやく開催されることとなりました。参加者は総勢60名であったため、3グループに分けて同様の内容を3日間開催しました。ワークショップ中は、毎日その日の振り返りをワーキンググループのメンバーとともにいき、2日目は初日より良いものを提供できるようにと日々改善していきました。2日間実施し、ワーキンググループメンバーも、参

加型の演習方法を取り入れるなどの工夫もできるようになってきて、3日目にはその集大成となる最終日を実施する予定でした。しかし、3月5日の朝、ワークショップ3日目の準備をしている所、チームリーダーに現地 ICRC（国際赤十字委員会）から新型コロナのためにガザとイスラエルの国境が閉鎖されると情報が入りました。これは、私達外国人もガザから出られなくなるということです。この情報を受け、日本赤十字社本社とも協議した結果、この日のうちにガザを離れることが決定されました。実際には、出勤後1時間ほどで宿舎へ帰宅し、昼には全ての荷物とともに ICRC の手配した車両へ乗り込み、ガザを後にしました。

イスラエルでも2月21日に Covid-19 の第1症例が報告され、徐々に症例数も増えてきていました。ガザ地区内でも、アジア人への偏見や言葉の暴力からはじまり、この頃にはアジア人だけでなく全ての外国人への風当たりが強くなってきていた時期です。私達日赤要員も、活動地は徒歩圏内であったにもかかわらず、通勤には車を使用したり、街中でも目立たないように Low Profile を意識して行動していました。このような状況ではありましたが、活動地の病院に到着すると、病院スタッフや事業メンバーはいつものように温かく迎え入れてくれました。「日本に帰るほうがコロナで危ないんじゃないの？」と明るく声をかけてくれる病棟看護師たちもおり、彼らのために、そして彼らと共にこの事業を進めていきたいと思っていた矢先の緊急帰国でした。

さて、ワークショップの最終日はどうなったかお伝えします。当日朝、急に日本人要員が今日帰ると言う。ワーキンググループメンバーは、さぞ面食らったと思います。しかし、そんな逆境にも打ち勝ち、ワークショップの1日目、2日目で得たノウハウを活かし、無事に成功させてくれました。その日のうちに連絡があり、参加型の演習が実演できた、参加者の満足度も高かったという報告とともに、当日の写真を添付してくれていました。私の心の準備もできていない中、志半ばで去ることを余儀なくされ、とても後ろ髪を引かれる思いであったのですが、この報告から、共に活動した2ヶ月余りは有意義なものであったと肯定的なフィードバックを得ました。短い期間ではありましたが、事業の目的やメンバーの役割は伝わったようで安心しました。



ワークショップの様子

こうして、現地には日本人要員が不在となりました。ここから、日本とガザをインターネットでつないだリモート支援が開始します。リモート支援は現在も続いており、具体的な内容は次の報告書で記載することとします。

コロナ禍にもかかわらず、現地で活動を続けてくれているスタッフ、日赤のみなさま、そして、いつも支援していただいている皆様に感謝申し上げます。